

現段階で筆者の知る限り、現在の宮崎市街地域全体を描いた最古の地図は「宮崎郡御領分御引渡絵図」（図1）と思われる。この絵図は赤江川（現・大淀川）兩岸に広がる延岡藩領宮崎郡の村々を描いたもので、文化七（一八一〇）年に作成された。「宮崎県史資料編近世2」には同地図がカラーで掲載されているので是非ご参照していただきたい。同史には、内藤氏の延岡入封（延享四年、一七四七）以来、この地帯の地理的把握は引続きの仮絵図ですまされていたが、「巨細之儀者相分兼、御差支之筋茂有之」という事情で、入封後六〇余年をへて、本絵図が作成された<sup>⑤</sup>と解説されている。そして「延岡藩領宮崎郡村々を包括的に描いた絵図としては、恐らく唯一のものであろう」と結んでいる。

この地図は当時の延岡藩宮崎領を描いたもので、現在の宮崎市街地は完全にもその中に含まれ、おおまかには北は池内村、東は上別府村、西は大瀬町村、南は古城村までが描かれている。地図は大淀川が中心に描かれ、田畑、山野、溜池や用水路等の水利体系、主な道路、集落そして村名が描かれている。縮尺の正確性には多少は問題があるとしても、江戸期の宮崎のようすを伝えてくれる貴重な地図である。

大淀川を挟んで上ノ町と中村町の集落が描かれ、上ノ町の北は江平町まで水田が続き、江平町は畑地であることから微高地帯であったであろうことが推測される。江平町の北西には神武社があり、その北西の山野には現在の大宮中学校の地にあった「宮崎代官所」（地図には「御役所」と記載）が記されており、「御領分御引渡絵図」のためか代官所は実際以上に大きく描かれている。

また池内村・下北方村の山野部を水源とし、「溝」を介して直接もしくは花ヶ島經由で江平池に流入し、さらに上別府村を経て大淀川等に流される当時の用水路そして下水路も詳細に描かれており、「日向地誌」に記載された当時の水利体系がよく理解できる。

### 三 明治時代① 宮崎県再置以前

延享四（一七四七）年の上別府村（上野町を含む）の戸数は二二四戸、人口は一三〇五人、それから一二二年後の明治二（一八六九）年には二八五戸、一二〇八人<sup>⑥</sup>である。つまり江戸期後半から明治にかけての約二二〇年間に現在の宮崎市中心部に相当する上別府村の戸数は三割増加したものの、人口は一割近く減少しており、少なくともこの地域が発展したとは言い難い。

明治初年の宮崎について昭和九年刊「宮崎県五十年史」<sup>⑦</sup>を改略すると

「明治の初年にありては、上野町、川原町、松山町はわずかに市街の形態があつたが、多くは半農半商にして、行商を専にする位であつた。これに反して対岸の城ヶ崎町、中村町は商況活発に賑わい、遙かに宮崎を凌駕していた。現在最も賑やかな橋通、旭通や県庁前から伊作町（注・宮崎銀行第一ビルの南側の路）に至る地域は、畑地に水田を交え、一四七銀行（注・橋通一丁目交差点南東角にあつた）付近には弥田ヶ池と称する池沼があつて、陰湿凄凉で子供女は行くことを恐れたと伝えられている」と記されている。

明治四年に廃藩置県が施行され、旧日向国においては旧藩領をもとに延岡・高鍋・佐土原・人吉・飫肥・鹿児島が生まれたが、同年十一月十四日には各県の統廃合が行われ、大淀川を境に美々津・都城県が誕生した。そして同六年一月十五日に両県を廃して（初代）宮崎県が設置された。

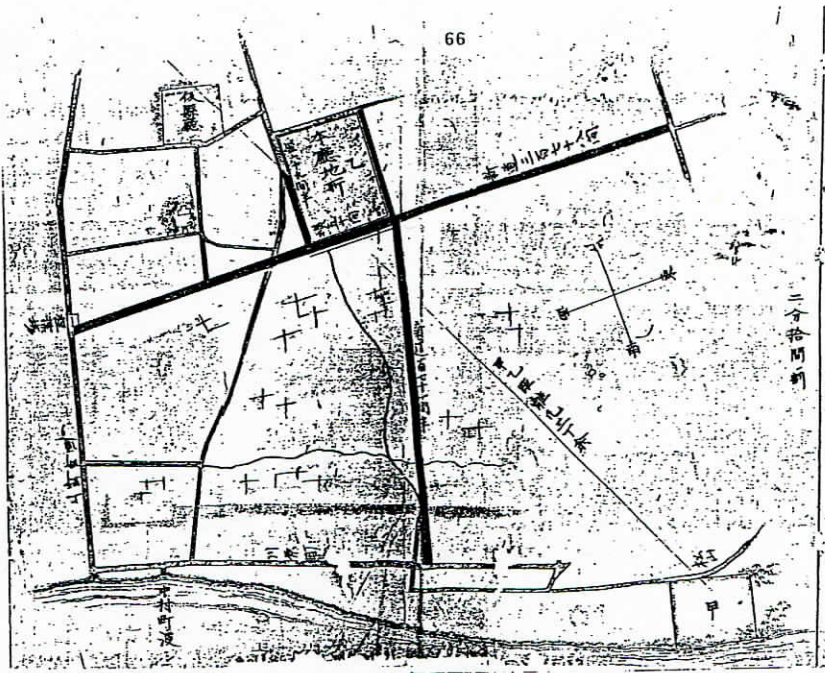


図2 明治6年「県庁建築地所改定届添付図」

このような状況を描いた地図が明治六年の「県庁建築地所改定届添付図（図2）」である。同年十一月八日に福山参事が大蔵卿大隈重信に上申した同届には「宮崎郡北方村から同郡上別府村の「甲」の位置に県庁地所の転地をお願いしたが、先月の大洪水によって同地は六、七尺も浸水したので、水難の無い「乙（現県庁）」への地所改定をお願いしたい」との意が記され、この見取り図が添付されている。県庁以南、大淀川以北、上野町以東、八幡馬場以西の限られた地域図であるが、市街地が未だ形成されていない明治初年の宮崎が描かれている。

「乙・本庁地所」と書かれた場所は現在の県庁の位置であり、「甲」は現在の宮崎観光ホテル付近である。堤防の無い大淀川、橋（明治十三年架設）も橋通り（明治二十二年開削）もなく、現在の県庁前通りと県庁馬場（現・本町通線）が新たに開削される道路（太い黒線・現物は朱色）として記載されている。

本庁地所の西側に鳥居のマークがある所が旧・小戸神社で現在の金城堂本店前の橋通り上に位置する。その北側に記された「仮県庁」は上別府村上野町元戸長役場であり、当時はこの地も上野町であったことが理解できる。県庁以南の地には田の印と溝が記されているだけである。

本庁地所は水難の無い土地であったとされるが、「宮崎町史」には「（注・明治六〇七年の本庁）建築当時掘り下げること約一間にして小字城と呼んだ」と記されている。「城（じょう）」とは、高地帯・畑・城郭などの意をもつが、本庁地所は周辺地の中でも微高地帯で水難の無い所であったことがわかる。またこの時「掘り下げたために出た土」で前述の弥田ヶ池を埋め立てたように、現在の宮崎市街地は沼・溝・微高地帯・田畑ありの豊かな農村地帯の風景が続いていたに違いない。

明治七年二月に県庁舎が完成し、県庁前通り、県庁馬場が開削され現在の宮崎市街地発展の産声をあげたのだが、脆弱な経済基盤のもとでは、それ以上に道路・産業等の整備が進むことはなかった。

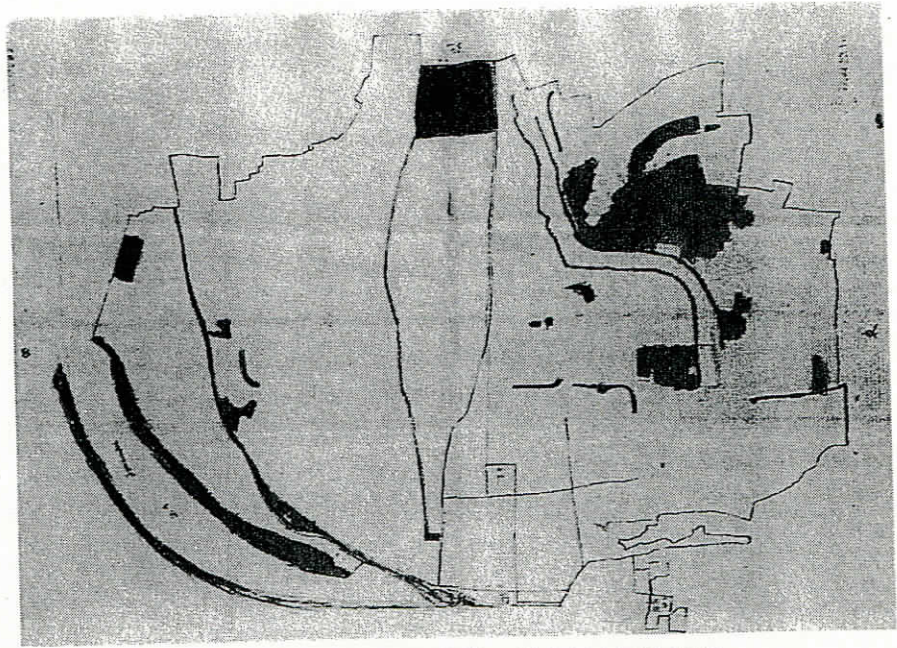


図3 明治9年「上別府村」(宮崎県立図書館蔵)

『日向地誌』の編者である平部嶺南は明治八年十二月から翌九年一月にかけて現在の宮崎市街地を巡検し、戸長らに各村図の作成を依頼している。その一枚が「上別府図(宮崎県立図書館所蔵嶺南文庫)」(図3)である。北は江平池、南は大淀川、東は現宮崎市中心(中央公園付近、西は現鶴島町付近までが描かれているが、ほとんど街らしい雰囲気のない地図である。実際には多少の集落もあったはずであるが、地誌の性質上、河川、水利体系、道路、原野を中心として描くこのような地図になるのかも知れない。

脆弱な経済基盤の中で道路整備も街づくりも進展しない状況にあった明治九年五月一日発行の「宮崎県地図」がある。この地図は国会図書館に所蔵されているが、おそらくは最初で最後の「(初代)宮崎県地図」と思われる。その地図は「宮崎県政八十年史上巻」<sup>3)</sup>に掲載されており、延岡と飢肥の市街図が併記されている。しかし、宮崎の市街図は無く、県都となって三年余りが過ぎていたにも係わらず、宮崎は未だ市街図として描かれるほどの街が形成されていなかったと考えられる。

この「宮崎県地図」の発行の約三ヶ月後、明治九年八月二十一日宮崎県は鹿児島県に併合され、さらに翌十年に西南戦争による多方面の被害によって、宮崎県は教育の振興、産業の開発、交通、運輸の整備など多方面にわたって不利益を生じさせられ、街の発展がさらに遅れることになる。

#### 四 明治時代② 宮崎県再置後

明治十六年五月九日に宮崎県は再置され、ついに宮崎市街地の発展も始まった。それを裏付けるかのように同十七年の「牛車止之儀及び添付図」が残されている。これは宮崎郡上ノ町外五ヶ町村戸長であった長谷川節が明治十七年八月四日に田辺県令に対して

「当地の道路や橋梁は時々大破し、その修理のために多くの費用や人手を有しております。地元住民が大いに迷惑しているこの状況は牛車の通行によるものなのです。牛車営業者の為に付近住民が道路を修繕しているのが実状であり、牛車は上別府字牛円より広島を経由して八幡馬場を通行させるようにして、その他の道は牛車は通行禁止にしたい(簡略)」

と、牛車通行禁止願を見取り図と共に添えて上申したものである。明治十七年当時に宮崎県下に牛車は二四〇台あったものの、荷馬車は一台もなく<sup>4)</sup>、道路に被害を与えていたのは牛車だけであつ